The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四四年五月-八月 新設文学賞と朗読文学
Author(s)	吉岡, 真緒
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 36-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57194
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼6月

・中国基地から初めて米軍B29が北九州を空襲

・マリアナ沖海戦敗北。空母、航空機の大半を失う

▼7月

・インパール作戦失敗。中止

・サイパン島、三万人玉砕

▼8月

・テニヤン、八千人玉砕

・大本営政府連絡会議、最高戦争指導会議と改称

・グアム島、一万八千人玉砕

・軍需省〈海戦以降物的国力の推移ならびに今後における見透し〉を作成（サイパン島失陥後の物的国力崩壊を認定）

・閣議、総動員警備要綱を決定（国内防衛体制を強化）

・最高戦争指導会議で〈世界情勢判断〉及び〈今後採るべき戦争指導大綱〉決定

一九四四年五月―八月　新設文学賞と朗読文学／吉岡真緒

太宰は、五月に「津軽」執筆のための津軽旅行に出発。途中、関東軍機関誌「満洲良男」八月号のために「奇縁（新釈諸国噺）」（内容未詳）を執筆、発送。八月、長男誕生。（『太宰治の年譜』）

戦局悪化に伴い不足する戦力や生産力の補充のため、寄合所から劇場、学校、病院に至るまで工場化し、学生や女性、児童、入院患者をも戦闘や労働に強制的に動員する施策が次々と打たれた。両国の国技館も工場に接収されたため、五月の大相撲夏場所は後楽園球場で開催となった。国民総出で「生産の増強」「食糧の確保」に従事する状況下、日本文学報国会では「生産戦場躍進運動」として前年から実施の、文士を組織的に軍需工場に派遣し産業戦士を「激励」する活動に加え、産業戦士となった文士の職場報告を機関誌「文學報國」に毎号のように掲載した。日本文学報国会は「日本の文学者が各個に分散し、個人的発言に終始してゐるやうな現状は徹底的に清算し、大和強力の旗の下に、全日本の文学者の総力を一つに結集した一元的組織」（「社団法人『日本文学報国会』設立趣意書」一八四二・六）である。太宰治「赤心」を収録した、本会編の『辻小説集』（一九四八・八、八紘社杉山書店）は「健艦醵金運動」の実施である。政府当局を後ろ盾にした本会への入会は「一種の免罪符」であるかの如き雰囲気が文士達を支配しており、当時「入会を自分から、断ったのは、中里介山ただひとり」だったと、嘱託だった平野謙（「日本文学報国会の成立」、「文学」一九六一・五）は回想している。中里はこの年四月に歿し、同月に歿した近松秋江とともに「文學報國」誌面で追悼がなされている。

六月一八日、文学報国会は情報局・陸軍省・海軍省・大政翼賛会後援の下、文学者総蹶起大会を主催する予定だったが、警戒警報発令により延期、事実上の取りやめとなった。同大会では文学報国会設立の文報小説賞を筆頭とした新設の賞に、芥川賞、直木賞、新潮賞等既設の賞を加えた計一四種の文学賞・国文学賞の合同授与式も行われる予定だったが、

【社会】
▼5月
・那須で初の都立戦時疎開学園開園
・国鉄初の女性車掌が勤務開始
・文部省、学校工場化実施要項を発表
▼6月
・閣議、戦時非常金融対策整備要綱を発表（空襲などの戦時災害に対する預貯金支払、応急資金供給対策）
・有珠山大噴火による昭和新山誕生
・国民学校初等科児童の集団疎開決定
▼7月
・東条内閣総辞職、小磯内閣成立
・閣議、国民学校高等科・中学校低学年生の動員、深夜業の強化を決定
・文部省、学童集団疎開の範囲を拡大
▼8月
・国民総武装が決定（竹槍訓練始まる）
・東京都区内の学童集団疎開第一陣出発
・軍需省、ダイヤモンドの買上げ開始
・沖縄からの疎開船対馬丸撃沈
・学徒勤労令、女子挺身勤労令公布

こちらは七月一〇日に実施された。「文學報國」には「受賞者の言葉」が三回に亘って掲載された。このときの新設の賞である歴史文学賞の最終候補四作に太宰治『右大臣実朝』（一九四三・九、錦城出版社）が残ったが、受賞は逃した。候補作八作のうち四作が同点で残り、陸軍軍人「座長柳川平助閣下に一任後、遂に『阿波山獄党』と決定した」（「文學報國」六・一）という。本賞を含めこのときが第一回目授与だった賞は八つである。文学賞に就いて、一月二〇日付「文學報國」で文学報国会事業部長・戸川貞雄は「国家の要請に応じて設立された」文学報国会が芥川賞や直木賞、新潮賞等の既存の文学賞とは別個に文学報国会賞を設定するは「論を俟たぬこと」であり、「営利的な出版企業態の存続も許されない今日以後にかんがみ、この機会に一層いさぎよく文学報国会賞のうちに解消せしめては如何かと思ふ」（「権威と責任と」）と述べている。つまり、国家の要請に応じた文学報国会が設立した賞以外は「接収」してはどうかというのだが、実現はしなかった。この時期の文学に対する坪井秀人の、「表現の個別的な主体が〈国体〉という巨大な単一の主体に吸収され同値される限りで、国家は当時極端に供給統制した物資をそれらの〈表現〉に惜しげもなく放出し」（『声の祝祭』一九九七・八、名古屋大学出版会）たとの指摘に鑑みるに、用紙不足の状況下異様とも言える新設賞の数は、言論統制の現れに他ならない。五月には大日本防空協会主催・情報局協賛の「『決戦防空』演劇脚本懸賞募集規定」（「文學報國」五・二〇）が、六月には日本文学振興会による戦記文学賞の制定（「文藝春秋」六）が、神風特別攻撃隊初出撃を三ヶ月後に控えた七月には「航空思想の普及に資し、航空に対する正しい認識を深め、これが関心をたかむる」に貢献せりと認められる文芸作品に贈られる航空文学賞の創設が発表（「文學報國」七・一）された。

七月、いわゆる横浜事件と称される筆禍事件の拡大で情報局は中央公論社と改造社の代表を呼び出し「営業方針において戦時下国民の思想善導上許しがたい事実がある」との理由で自発的廃業を指示、両社は月末に解散した。（『中央公論社の八十年』一九六五・一〇）

【文化】

▼6月

・「詩研究」（四季・歴程等統合）創刊

・「俳句日本」（層雲・海紅等統合）創刊

・第一回一葉賞発表

　辻村もと子「馬追原野」

・第一回文学報国会小説賞発表

　豊田三郎「行軍」

・第一回大陸開拓文学賞発表

　大滝重直「解氷期」

・第一回興亜文学賞発表（受賞作なし）

　選外佳作　呉君璧「東方の曙」

・第六回農民文学有馬賞発表

　橋本英吉「東方の種族」

・第四回詩人懇話会賞発表

　蔵原伸二郎「戦闘機」

・大日本言論報国会、〈言論人総決起大会〉開催、ヒトラーへ激励電報送信

▼7月

・第七回新潮社文芸賞発表

　第一部　寺門秀雄「里恋ひ記」

　　森三千代「和泉式部」

この直後、八月一日付「文學報國」には、「自己の人格以外の一切を失つた」、「名声もない、発表機関もない、生活の形式もない」現今の作家が進むべき「挺身」を次のように示す石川達三の論説「作家は直言すべし」が掲載された。

文学に執着する心をすて去るべき時である。まだ残つてゐる寥々たる雑誌や新聞の文芸欄への執筆を心懸けるのも愚劣であり、他の形式、即ち放送文芸や壁小説などで生活と名声とを維持しようと考へることも見すぼらしい努力に過ぎない。書き卸し小説で生活を立てようとする考へ方もまた、取締りの警官の目をくゞつて野菜の買出しをやるやうな悲しい努力ではなからうか。

端的にいふならば日本の文化当局は吾々に小説を要求しては居ないのだといふもあまりに失当ではあるまい。

現下国内の最大難問は民衆の道義心の底下である。その原因は配給の不備であり、言論の不自由であり、又は政治当局の非才無力である。こゝに私は作家が働くべき大きな分野を見るのである。一切を失つた作家は、右の如き隘路にむかつて挺身して行ける筈である。当局者にむかつて直言し得る立場を持つのである。もはや一切を失つて更に失ふべき何物をももたぬ吾々は何ものをも恐れることなくこのやうな行動に出ることができる。

石川は、太宰が受賞を逃した第一回芥川賞受賞作家であり、日中戦争に取材し「中央公論」一九三八年三月号に発表した「生きてゐる兵隊」が、皇軍兵士の非戦闘員に対する残虐行為を記述し安寧秩序を乱したとして発禁になったうえ、発行者・編集長とともに特高に取り調べられ有罪判決を受けた経歴を持つ。右はその石川の、体制批判ととられかねない内容であり、当時の文学状況を直視した内容である。これに併せて徳田戯二「夏の短篇其他（文芸時評）」（「文藝首都」八）における「三田文学の四五月合併号が印刷の関係で今

第二部　牧野英二
「突撃中隊の記録」

・東洋学会設立
・「をだまき」創刊

▼8月
・第19回芥川賞決定
八木義徳「劉廣福」小尾十三「登攀」
・第19回直木賞決定
岡田誠三「ニューギニア山岳戦」

【代表作】

▼5月
・檀一雄「天明」（『現代』）
・太宰治「雪の夜の話」（『少女の友』）
・太宰治「武家義理物語（新釈諸国噺）」（『文藝』）

▼7月
・石一郎「分屯地」（『新潮』）
・川端康成「一草一花」（『文藝春秋』）
・谷崎潤一郎『細雪』上巻（私家版）

▼8月
・太宰治「東京だより」（『文學報國』）
・尾崎一雄「田舎がたり」（『文藝春秋』）
・太宰治『佳日』（肇書房）

頃に店頭にあつた」や、砂原彪「六月・七月の作品」（『日本文學者』八）の「発行日が何時なのかさへ、このごろは見当がつかない」や、河上徹太郎「短篇小説の在り方」（『文藝春秋』七）の「紙が少くなつたから短篇小説が流行つて来たといふことは、昨今文壇の争はれぬ特徴」等の言説を見ると、困窮と文学形式の関係が伝わってこよう。

石川は「放送文芸」にも言及している。戦時下のラジオは国民を統制する公共性と緊密に結びついていた。七月一〇日付「文學報國」の「聴覚に訴へる文学」には、放送局と協力して朗読文学懇談会が開かれ「文学表現の革新的分野を開き国語の音の美しさに於て文学の国民生活の滲透を目指す朗読文学の振興方策」が話し合われたとある。いわゆる国語醇化運動である。同号掲載の猪俣勝人「シナリオ文学の道」には、文学報国会におけるシナリオ文科会の独立に対する喜びとともに「小説文学の衰退」、「時代の要求によつて、ほとんど他力本願式にシナリオ文学の道が拓かれたのだ」との状況認識が示されている。続く八月一〇日付同誌には「朗読文学　短篇小説特輯」が組まれ、室生犀星「謎」、大林清「月光の曲」、庄司總一「蛍」、和田傳「もつと大きなじやがいも」とともに太宰治「東京だより」が発表された。その巻頭の文言に、朗読文学は「唯単に用紙不足による出版の困難、新聞雑誌の頁数減少などに依る発表舞台の激減といふやうな外部的条件の制約」という「消極的理由」よりも、近時の「放送技術事業の発展普及」や「集団生活者層の増加に伴なふ拡声装置の整備」等の時代の要請によって必然的に樹立された「文学の新分野」と位置づけられている。周知のように近代文学の歴史は音読から黙読へと個人化する読者とともに変遷した文体の歴史でもある。それに逆行する朗読文学樹立は、文学賞新設の機運とともに国民を統制する機器として文学の公共性を高めるとともに、文学の新生面を開いたかもしれない。公共性と芸術性は別の問題である。なお「文學報國」の関連から朗読文学としての「東京だより」に着目した論として本誌掲載の井原あや「閉ざされた声」がある。